

―昨年の管内JA取扱高は過去2番目の3,456億円を記録した。どのような1年だったか。

村田氏 スタートはコロナの影響がどれだけ出るか心配しながらの営農活動だった。干ばつや長雨の影響も受けたが、作柄は平年並みかやや良いぐらいで、とりあえずほっとした。



ただ小豆は十勝ではメインの作物の一つなので、その価格下落は生産者にとっては苦しかった。(素俵・60kmで)2万円をこんなに早く割ってしまうのかというのが正直なイメージだった。



大野氏 去年はコロナ発生後に3、4月と和牛の枝肉を中心に暴落する状況になった。外食やホテル需要が激減ということで、肉の冷凍庫がいっぱいになり出荷できなくなるのではないかと心配もあったが、関係機関の努力や国の対策もあって最悪の事態は免れた。外食の中でも焼き肉店、また量販店や宅配は健闘したと聞く。価格の上がり下がりがあったが、生産は落とすことなくできた。

―農水省の対応はどのようなだったか。

遠藤氏 去年はコロナ対策が中心で、補正予算も3回組んでいる。コロナがいつか終息した時に、生産者が倒れてしまっていたら元も子もない。大きな額で予算を組み、われわれ出先の機関が説明して回った。オンラインも活用しながら説明した。



―遠藤氏は昨年、宗像氏と千葉氏は今年着任した。十勝農業の印象はどうか。

遠藤氏 十勝農業の規模は平均46haで大規模経営が進んでいる。最先端の技術、スマート農業の活用も進んでいるし、何とんでも生産者の年齢がすごく若い。平均67歳と言われる中、十勝は54歳。最新技術をどんどん取り入れて前向きにやっこいこうという農業に対する前向きな姿勢がある。

宗像氏 十勝は1戸あたりの面積が非常に大きい大規模農業。酪農・畜産も増えてきており、畑作と良い形で両輪になってきている。

千葉氏 北海道の中でも一番の生乳生産量、ホクレン十勝地区家畜市場も年間取り扱い頭数が日本一の市場。今年もかなり生乳が伸びているという状況だ。頭数が増えていて、1頭あたり乳量も増えている。牧草やデントコーンの作柄も良いと聞いている。



―コロナの感染が拡大し、畜産への影響はどうだったか。

大野氏 外食やホテルの消費が減ったが、道産牛肉に対して、安全安心という支持があったことによって最悪の事態にならずに何とかあった。量販店や宅配需要は良く、外食の落ち込みを若干カバーできた。

―畑作や野菜の影響はどうだったか。

村田氏 自分が生産する一つに加工用ジャガイモがあるが、加工用ジャガイモでも使う用途によって明暗が分かれた。例えばポテトサラダの原料になるジャガイモは観光向けの需要が多く、在庫が余った。

逆にポテトチップス向けは需要が伸びて、引き合いが強かった。家で食べるのはポテトチップスということ。野菜は一昨年の価格が落ち込んでいて、その落ち込みの方が痛かった。

―青年部活動への影響は。

村田氏 私たちの活動は食農教育活動が柱だが、ホームステイ受け入れなど対面活動は難しかった。ただ広報活動として営農の様子をテレビで発信すると視聴者の反応が良かった。青年部の30秒動画コンテンツ(「動画で発信!農の魅力コンテスト」)では、JA陸別町青年部が最優秀を受賞した。こうしたでる活動に力を入れ、農業の魅力を発信した。

―販売面の影響はどうだったか。

宗像氏 ホクレンは道外の販売展開では仙台から福岡まで事業所を持っているがコロナが拡大して4月中旬からは商談に行けなかった。提案で現物サンプルを持って行って話し合うことができず、歯がゆい思いがあった。ただ次第にウェブでも商談に取り組めるようになってきた。

